
薄れゆく君の面影

五十嵐 ライカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薄れゆく君の面影

【Nコード】

N0139V

【作者名】

五十嵐 ライカ

【あらすじ】

真っ白な世界で一人、君の面影と…

(前書き)

思いつき

随分前から、僕はこの場所に居た。

冷たい白い物しか目に入らない場所に。

いつから居たのか、何故ここに居るのか…ここに来る前にどこに居たのか…以前の生活のことも、記憶も何も頭の中になく、自分の家族が居るのかさえもわからなくなっていた。

考えても、考えても…何もわからない。

0から何も生まれてこないかのように…

唯一胸に残って離れないのは…誰かの笑顔だった。

「おはようございます。検温の時間です。」

いつもの言葉で目を覚ます。

体を起こし、体温を測り、食事を待つ。

僕が居るのは病院で、もう完全に病院でのサイクルができてしまうくらい長く入院している。

体に特に不都合はないが…ここでの暮らし以外は何も知らず、ここ以外でどう生活するのかわからない。

寝て起きて食事を取る、その単調な毎日を延々と続けていた。

まだ幼く、あどけない笑顔の少女が目の前に居る。

ふと他に目をやると、少し大人びた服を着た少女がこちらを見て笑っていた。

そして…美しい少女…否、美しい女性が微笑んでいた。

どの人も、年も服装も違うのに、何故か同じような笑顔…

君は誰なの？と、考えれば考えるほど、答えが出ず、胸が苦しくなる…。

問いかけようにも声は出ず、思い出せそうになった瞬間…いつもの白い天井が見えた。

どうやら眠っていたらしい。
夢で見た笑顔が頭から離れず、僕の心を痛ませた。
そして再び目を閉じる。

「先生、こんにちは。○○さんの様子はいかがですか？」
「こんにちは。○○さんですか…もう、あとは…」

ふと目を覚ますと、僕のベッドの近くから、嗚咽を上げ、泣いている声が聞こえた。

それはとても悲痛な声で…僕は声の主を探した。
視界の隅に、肩を震わせている女性が居た。

何故だかわからないけれど、僕の心も痛み、泣かないで…、と強く思ったが、声は出ず、見守ることしかできなかった。

段々とまぶたが重くなり、それでも女性を見守り続けていたら、唐突に思い出した。

女性は…いや、君は僕が最初で最後に愛した人だった。

そして夢の中でも君と出会っていたんだね。

忘却の彼方にあった、笑顔の君。

そして僕は、目を閉じた。

薄れゆく君の面影

(最期は君の思い出とともに眠る。)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0139v/>

薄れゆく君の面影

2011年10月9日12時02分発行